

報告

F. Nightingale の著作にみる臨床実習に関する考え方の今日的意義

The Current Meaning of the Thinking Regarding Clinical Practice by Nightingale's Writings

水口陽子¹⁾, 高島葉子¹⁾
Yoko Mizuguchi¹⁾, Yoko Takashima¹⁾

キーワード：ナイチンゲール, 臨床実習, 看護学教育

Key words : F.Nightingale, clinical practice, nursing education

要旨

ナイチンゲールの臨床実習についての考え方の特徴を浮き彫りにし、彼女の考える臨床実習のあり方の今日的意義を検討するために、ナイチンゲールの著作から記述を取り出し、内容分析の手法で分析した。その結果、5カテゴリーが抽出され、彼女の实習についての考え方の特徴は、【臨床における実践の意義】を重要視し、【看護の理念に貫かれた教育】を基盤に、病人（看護の対象）の把握に必要である【五感を通して感じる力を活かした観察】と【記録により実践を意味づける訓練】を目標に掲げ、【実習指導者の看護実践能力と教育指導能力】の必要性を提示したことである。看護実践能力向上のために不可欠な力を論理的に検討し、感じとり観察する力と考える力の必要性を示している点で、今日の看護学教育においても十分に通用しうる本質的なものである。特に感じる力の強化については、重要な指摘であり、この力を強化していく必要性が示唆された。

I. はじめに

ナイチンゲールは、近代看護の礎を築いたことで知られているが、看護教育の面でも1860年に、ナイチンゲール看護婦訓練学校（以下、看護婦訓練学校とする）を設立するという業績を成し遂げた。当時は、学校としての独立した建物はなく、臨床講義はあるが、教育内容は病棟での訓練がほとんどを占めており（Woodham-Smith, 1950）、ベッドサイドでの訓練が中心であった。卒業生は英国内の病院の他に海外の病院でも活躍するようになり、いわゆる「ナイチンゲール方式」とよばれる看護教育の方式は、全世界に広まっていった。

これまで、看護学教育における臨床実習は「臨床の場において見学や自ら一部の看護を実践することを通して行う学習方法」として定着しており、看護実践能力を育む場として、看護学教育の中で不可欠な内容と

なっている。しかし、実施することがあたりまえのこととして捉えられてきた面もある。今日、高度な専門医療を必要とする患者が増加し、看護職が看護実践を行う上での技能的な能力（看護実践能力）は、より高度なものが求められるようになってきた。特に新人看護師の能力の低下が指摘され、実習内容と方法のあり方も問われ（小山, 2007）、本学でも臨床実習の充実に向けたカリキュラム改善に取り組んできた。そこで、改めて「看護覚え書」を読む中で、臨床実習の重要性を述べた部分が目を引き、一貫した考えのもとに教育を展開していることに気づいた。また木下ら（1995）は、看護婦訓練学校における訓練に関する著作を検討し、実際の教育活動だけでなく看護の考え方や教育で育む目標となる看護婦の能力の記載があり、教育活動とその基盤となる考え方には密接な関連があることを示唆している。これまで研究者は、ナイチンゲールの著作

から現代看護につながる論理を取り出す試みを積み重ねてきた(小野寺ら, 1991, 嘉手苅ら, 1994)。今回は、彼女の著作から、臨床実習についての考え方をたどり、看護学教育における臨床実習についての本質的理解を深めたいと考え、研究に着手した。

II. 目的

ナイチンゲールの著作から、ナイチンゲール自身の臨床実習に関する考え方の特徴を取り出し、さらにナイチンゲールの考える臨床実習のあり方の今日的意義について考察する。

III. 用語の定義

1. 実習指導者

臨床現場において臨床実習の指導をする看護職及び看護系教員

IV. 研究方法

1. 対象文献の選定

1) ナイチンゲールの思想を知る手がかりとなる代表的な著作を集めて翻訳したナイチンゲール著作集1～3(Nightingale, 1851-1900)を対象とし、臨床実習に関する考え方の記述がある文献を各研究者が選ぶ。臨床実習に関する考え方の記述は、先行研究(木下ら, 1995)を参考にして、臨床実習そのものに関する考え方の記述とその基となる看護の定義、臨床実習で育む目標となる看護婦の能力の記述を含むものとした。

2) 上記の文献について、書かれた年代及び看護婦養成学校における教育との関連に注目して文献の特徴を捉えた上で、臨床実習に関する考え方の記述があることを研究者間で確認する。以上より、看護教育の準備期を経て学校を設立して教育を開始し、教育内容を充実し発展させ継承するまでの期間に書かれた臨床実習に関する考え方の記述がある「カイゼルスウェルト学園によせて」「看護覚え書」「救貧院病院における看護」「アグネスジョーンズをしのいで」「看護婦の訓練と病人の看護」「看護婦と見習い生への書簡1～14」「病人の看護と健康を守る看護」を選定し、対象文献とした。

2. 分析方法

1) 個々の対象文献のナイチンゲールの臨床実習の考え方に関する記述を読み込み、分析単位を主語と述語からなる一文と定め、共同研究者が各々文献を読み込み、ナイチンゲールの臨床実習についての考え方に関

する記述を選ぶ。

2) 選び出した記述内容の根拠を研究者間で話し合いながら、キーセンテンスを取出しカードに記述する。そのキーセンテンスの内容を基にコード化し、内容分析の手法で、類似性に基づきサブカテゴリーを抽出した。さらにサブカテゴリーを意味内容の類似性に従ってカテゴリーに分類した。カテゴリーの信頼性は、共同研究者以外の内容分析に精通した看護学研究者2名にも分析依頼し、Scottの式に基づき分類の一致率を算出し(70%以上を基準)検討した。

3) 得られた結果から、ナイチンゲールの臨床実習への考え方の特徴を取り出し、さらにナイチンゲールの臨床実習に関する考え方の今日的意義について考察する。

V. 倫理的配慮

既に公表されたナイチンゲールの著作を対象として分析を行ったので、特段の倫理的配慮は要しない。

VI. 結果

1. ナイチンゲールの実習に対する考え方

ナイチンゲールの実習に対する考え方について分類し、14サブカテゴリーと5カテゴリーが抽出された。カテゴリーはさらに、看護の専門性を踏まえた臨床実習の意義に関する【看護の理念に貫かれた教育】、臨床における実践の意義、臨床における訓練の重要性和訓練方法に関する【五感を通して感じる力を活かした観察】、【記録により実践を意味づける訓練】、【実習指導者の看護実践能力と教育指導能力】に大別された。カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >で示し、抽出した内容を以下に述べる。

1) 看護の専門性を踏まえた臨床実習の意義(表1)

(1) 看護の理念に貫かれた教育

【看護の理念に貫かれた教育】には<看護を定義づける><訓練の目的・目標>のサブカテゴリーが含まれる。ナイチンゲールは「看護とは新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさを適切に保ち、食事を適切に選択し管理すること—こういったことのすべてを—患者の生命力の消耗を最小にするように整えること」(Nightingale, 1860)と看護を定義づけ「看護は実際的かつ科学的な、系統だった訓練を必要とする芸術」(Nightingale, 1882)と記述している。さらに「どのように自分を訓練するか、どのように自分でものを観察するか、どのように自分でものを考えるか」(Nightingale, 1872-1900)と訓練のねらいを示した。

表 1 看護の専門性を踏まえた臨床実習の意義に関する内容

カテゴリー	サブカテゴリー (コード数)	主なコード	主な記述例
看護の理念に貫かれた教育	看護を定義づける (3)	看護とは生活過程を、患者の生命力の消耗を最小にするように整えること	新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさを適切に保ち、食事を適切に選択し管理すること。こういったことのすべてを、患者の生命力の消耗を最小にするように整えること (看護覚え書 p150-151)
		看護とは実際のかつ科学的な、系統だった訓練を必要とする芸術	看護は・・実際のかつ科学的な、系統だった訓練を必要とする芸術 (看護婦の訓練と病人の看護 p97)
	訓練の目的・目標 (3)	<訓練>とは患者が生きるように援助することを看護婦に教えること	<訓練>とは患者が生きるように援助することを看護婦に教えることにほかならない (看護婦の訓練と病人の看護 p97)
		訓練で、どのように自分を訓練し、自分でものを観察し、自分でものを考えるかを学ぶ	訓練によって私たちが得るべきものは、どのように自分を訓練するか、どのように自分でものを観察するか、どのように自分でものを考えるかこの3つを身につけることにつきます。(看護婦と見習い生への書簡 (2) p303)
臨床における実践の意義	実践の必要性 (4)	知性だけが先に進み、実践は遅れている状態である	19世紀・・女性は・・知性の足だけが前に進んできているのであって、実践の足は後ろに残ったままの状態なのである。その意味で女性は斜めに立っている現状なのである。(カイゼルスウェルト学園によせて p5)
		熟練した病棟看護婦になるには<言葉>でなく、一定期間の実践が必要	病棟シスターになるには<言葉>でなく、実践の5年間が必要なのです (看護婦と見習い生への書簡 (13) p448)
	病人を看護する学習の場 (2)	知識だけでなく実践が必要で、<行う>ことで<知る>ことができる	私たちは知識だけでなく実践を必要としています。私たちが何かを<知る>のはそれを<行う>ことによるのです (看護婦と見習い生への書簡 (5) p360)
		病気の看護ではなくて、病人の看護であるからこそ、看護は、病人のベッドサイドでのみ教え得る	病気の看護ではなくて、病人の看護というところに注意してほしい。・・看護そのものは、病人のベッドサイドや病室内または病棟内においてのみ教え得るという理由もここにあるのである (病人の看護と健康を守る看護 p125)
		全てのことは書物と講義によって教育でき試験だけで評価できると信じているようになってきたことは危険	危険は・・日に日に増大してきている。・・それは・・すべてのことは書物と講義によって教えるし、試験によってテストされる一記憶こそが優秀さへの重要な段階であると信じているようになってきたことである (病人の看護と健康を守る看護 p138)

このように<看護を定義づける>ことで看護の専門性を明確にし、看護者になるために看護の理念に導かれた訓練が必要と考えて<訓練の目的・目標>を示していた。

(2) 臨床における実践の意義

【臨床における実践の意義】には<実践の必要性><病人を看護する学習の場>のサブカテゴリーがあった。臨床実習を重要視する理由としては、まず、「19世紀の女性は・・知性の足だけが前に進んで・・実践の足は後ろに残ったままの状態・・女性は斜めに立っている」(Nightingale, 1851)と当時の現状を述べている。また、「何かを《知る》のはそれを《行う》ことによる」(Nightingale, 1872-1900)という確信を得て、<実践の必要性>を説いている。さらに看護婦訓練学校における訓練のあり方に関連して「病気の看護ではなくて、病人の看護というところに注意してほしい。・・看護そのものは、病人のベッドサイドや病室内または病棟内においてのみ教え得るという理由もここにある」(Nightingale, 1893)と述べ、「危険は・・全てのことは書物と講義によって教えるし、試験によってテストされる一記憶こそが優秀さへの重要な段階一と信じているようになってきたこと」(Nightingale, 1893)と当時の英国の教育方法に警鐘を鳴らしている。病気に関する知識は講義室の中で学ぶこともできるが、知識の修得だけでは不十分であり、生きて生活している病人の看護は臨床実習を通してしか学びえないと説いている。このように実践を通して学ぶことが

最も重要であり、看護の対象が病人であるからこそ<病人を看護する学習の場>の重要性を説き、病院における学習の必要性の根拠を示していた。

2) 臨床における訓練の重要性と訓練方法 (表2)

(1) 五感を通して感じる力を活かした観察

【五感を通して感じる力を活かした観察】には<五感による観察の重要性><生活状況の観察><観察力の訓練の必要性の根拠><感じる力の重要性><持続的な訓練の必要性>のサブカテゴリーが含まれる。「看護婦の眼と耳とは訓練されていなければならない」(Nightingale, 1882)と記述があるように、特に「自分自身の五感・・視覚・・聴覚・・嗅覚・・触覚・・味覚によってとらえたさまざまな印象に行き届いた心向ける」(Nightingale, 1882)という<五感による観察の重要性>を指摘し、「(観察力をもつことが)看護婦であることの<必要条件>」(Nightingale, 1882)と強調している。一方、「臨床指導の本質は、看護婦に・・観察ができるようにすること・・脈拍の状態、食事の影響、睡眠の状態・・便秘がちか・・」(Nightingale, 1860)という生活者としての人間の<生活状況の観察>の必要性を説いている。<観察力の訓練の必要性の根拠>としては「患者が熱を出している時に、病室をオープンのように熱くするかと思うと、明け方、患者が冷え込んでいるときに火を消してしまったりする。こんな看護婦には眼も耳も手も備わっていないようである」(Nightingale, 1860)と述べているように、当時の訓練された看護婦不足の状況が

表2 臨床における訓練の重要性と訓練方法に関する内容

カテゴリ	サブカテゴリ (コード数)	主なコード	記述例
五感を通して感じる力を活かした観察	五感による観察の重要性(6)	自分自身の五感によりとらえた印象について、行き届いた心に向ける訓練された力が看護婦の(必要条件)	自分自身の五感によってとらえたさまざまな印象について、行き届いた心に向ける訓練された力—これが看護婦であることの<必要条件>である。というのはそのさまざまな印象は、その患者がどんな状態にあるかを<語り>かけているはずであるからである。(看護婦の訓練と病人の看護 p76)
		看護婦は眼と耳の訓練が不可欠	看護婦の眼と耳とは訓練されていなければならない。(看護婦の訓練と病人の看護 p76)
		嗅覚や触覚、味覚は看護婦にとって重要な働きをする	嗅覚や触覚は二本の利き手のように大切なものであるし、味覚は看護婦にとって頭のように欠くべからざる働きをすることがしばしばある(看護婦の訓練と病人の看護 p77)
		眼で見ること (to see) は見てとる (to look) ことと違う	眼で見ること (to see) は必ずしも見てとる (to look) ことではない(看護婦の訓練と病人の看護 p76)
	生活状況の観察(2)	患者の顔や態度、声に現れる変化の意味を(理解すべき)	看護婦は・・・患者の顔に現れるあらゆる変化、態度のあらゆる変化、声の変化のすべてについて、その意味を(理解すべき)なのである。(看護婦覚え書、看護婦とは何か p366)
		臨床では身体状況に加えて生活状況の観察が必要	臨床指導の本領は、看護婦につきのような観察ができるようにすることである。すなわち—脈拍の状態—食事の影響。・・・睡眠の状態・・・喀痰の状態・・・咳嗽の性質・・・便秘がちかゆるめか・・・便の色・・・(看護婦覚え書 看護婦とは何か p374,375)
	観察力の訓練の必要性の根拠(7)	観察力のない看護婦が患者に害を与える例がある	こんな看護婦は・・・自分の患者が目覚めているか眠っているかもまるで知らない。夜、患者が熱を出している時に、病室をオープンのように暑くするかと思うと、明け方、患者が冷え込んでいるときに火を消してしまったりする(看護婦覚え書、看護婦とは何か p371)
		眼も耳も手も備わっていないような看護婦がいる	こんな看護婦には眼も耳も手も備わっていないようである。(看護婦覚え書、看護婦とは何か p,371)
		医師の指示は、ほとんどが条件つき	医師の指示は、そのほとんどすべてが条件つきのもの(看護婦の訓練と病人の看護 p75)
	感じる力の重要性(4)	受持ち患者は高価な家具や病気の牛とは違う	多くの看護婦は、もし受け持ち患者が高価な家具であったり病気の牛であったとしたら、いま自分のしていることは違った世話の仕方をするのであろうか?・・・患者は、きれいに手入れして壁につけて並べ、傷がついたり破損したりしないように気をつける、そんな家具とは違うのである。(看護婦覚え書、看護婦とは何か p365)
		看護の仕事は人の感情の中へ自己を投入する能力を必要とする	この世の中に看護ほど・・・自分自身は決して感じたことのない他人の感情のただ中へ自己を投入する能力を、これほど必要とする仕事はほかに存在しないのである(看護婦覚え書 看護婦とは何か p365)
		感じとることと自分でものを考えることが会得できなければならない	どのような訓練を受けたとしても、もし(1)感じとること、(2)自分でものを考えること、この二つが会得できなければ、その訓練も無用のものになってしまう(看護婦と見習い生への書簡(2) p285)
持続的な訓練の必要性(4)	看護婦は患者を自分が一番よく理解していると確信がもてるようになるべき	看護婦は・・・自分ほどよく理解している者は他にはないと確信がもてるようになるまで、・・・研究すべきなのである。(看護婦覚え書、看護婦とは何か p366)	
	間違いもするであろうが、努力を続けていくことでよい看護婦に育っていく	間違いもおかすであろうが(そうしている間に)彼女はよい看護婦に育っていくのである。(看護婦覚え書、看護婦とは何か p366)	
	有意義な経験をもたらすのは観察だけ	経験というものをもたらすのは観察だけである(看護婦覚え書、看護婦とは何か p219)	
記録により実践を意味つける訓練	事実を書きとめること(2)	患者についての記録をつけることからすぐにはじめること	患者についての記録をつけることからすぐにはじめなさい。最初に患者を見た瞬間から、もう観察は始められるのです。(看護婦と見習い生への書簡 p303)
		短時間でよいから、患者の病状の進行具合や変化などについて簡単に書きとめること	記録といわないまでも、1日にほんの十五分でもいいですから時間をとって、自分以外には理解もできないような言葉でもいいですから、二、三人の患者の病状の進行具合や変化などについて簡単に書きとめるようにし、あとで忘れてたり混乱しないようにしなさい(看護婦と見習い生への書簡 p304)
実践の根拠を意味つける(2)	行われたことの原因や、症状やその症状の「因果関係」についても詳しく書くこと	行われたことが《なぜ》されたか《なぜ》他のことでなかったか、についても、さらに症状やその症状の「因果関係」についても詳しく書くこと(看護婦の訓練と病人の看護 p83)	以上のことが行われないと、一般に看護生はうめぼれた、病棟の動く機械に墮落してしまうであろうし、・・・この事柄のための制度が準備されていないと、彼女らは患者に対してだらだらとしかも細切れに研修年限を過ぎてしまひ、実際の看護・・・においてはたいした進歩もしないことになってしまうだろう(看護婦の訓練と病人の看護 p84)
		記録の意味付けが行われないと、病棟の動く機械のように進歩がみられない	
実習指導者の看護実践能力と教育指導能力	訓練の場としての病院(2)	看護婦は<訓練の目的で組織準備された>病院で技術的に訓練されるべき	看護婦は<訓練という目的のために組織準備された>病院で技術的に訓練されるべきである(看護婦の訓練と病院の看護 p78)
	実習指導者の看護実践能力(2)	学校長は看護婦たちの手本となる優れた看護婦であるべき	監督者は自らを看護婦たちの手本にしなければならないのである(アグネス・ジョーンズをしのいで p247) マトロンは病院中で最も優れた看護婦でもある(看護婦の訓練と病人の看護、p80)
	実習指導者の教育指導能力(6)	学校長は訓練する能力をもつべき	訓練をする能力のあるマトロンを置かねばならない(救貧院病院における看護 p15)
		婦長は有能な訓練者であるべき	婦長は有能な訓練者でなければならない(救貧院病院における看護 p16)
		学校長は見習いの教育に熱意を持つべき	見習生に<よく学ばせたい>という願いをもっているのがマトロンでなければならない—このことは普通に考えられているよりも大切なことである。(看護婦の訓練と病人の看護 p 88)
		指導者は、学生が受持ち事例に興味を抱くようにすること	訓練にあたる看護婦は、生徒としての看護婦が自分の受け持っている事例に興味を抱くようにしむけなければならない。生徒はその病人の苦しみを感じとらなくてはならないのであり、もし《それらの事例がどのようなものであるか》がわかっていないならば、生徒はその事例に看護婦としての興味をもつことができない。彼女が関心を抱いた事例に関しては、彼女の看護は、二倍の働きをする(看護婦の訓練と病人の看護 p91)
		学生が受持ち事例がわかることで興味を抱てる	生徒はその病人の苦しみを感じとらなくてはならないのであり、もし《それらの事例がどのようなものであるか》がわかっていないならば、生徒はその事例に看護婦としての興味をもつことができない。看護婦の訓練と病人の看護 p91)
学生が受持ち事例に関心を持ればよい看護ができる	彼女が関心を抱いた事例に関しては、彼女の看護は、二倍の働きをする(看護婦の訓練と病人の看護 p91)		

ら、観察力の必要性に気付いたことがあげられる。また「医師の指示はそのほとんどすべてが条件付きのものである」(Nightingale, 1882)と述べ、その時その時の観察により、条件を見抜きながら援助していく重要性を示している。さらに、観察の対象となる人間は「病気の牛・高価な家具・とは・違う」(Nightingale, 1860)と主張し「この世の中に看護ほど・自分自身は決して感じたことのない他人の感情(feeling)のただ中へ自己を投入する能力を、これほど必要とする仕事はほかには存在しない」(Nightingale, 1860)と述べ、その違いは人間は「feeling」を持っている存在であるとしている。＜感じる力の重要性＞を認識し、看護婦は五感を通して観察し「患者の顔に現れるあらゆる変化、態度のあらゆる変化、声の変化のすべて・その意味を《理解すべき》」(Nightingale, 1860)と全人的な状況を捉える必要を説いている。さらに「感じる力」は「この能力を全然もっていないのであれば・看護から身を退いたほうがよいであろう」(Nightingale, 1860)とまで述べるほど重要と考え、「自分ほどよく理解している者は他にはいないと確信がもてるようになるまで・研究すべき・間違いもおかすであろうが《そうしている間に》・よい看護婦に育っていく」(Nightingale, 1860)と＜持続的な訓練の必要性＞を述べていた。

(2) 記録により実践を意味づける訓練

【記録により実践を意味づける訓練】には＜事実を書きとめること＞＜実践の根拠を意味づける＞のサブカテゴリーが含まれる。ナイチンゲールは、「患者についての記録をつけることからはじめなさい。最初に患者を見た瞬間から、もう観察は始められる」(Nightingale, 1872-1900)と述べるだけでなく「1日にほんの十五分でもいいですから時間をとって・患者の病状の進行具合や変化などについて簡単に書きとめるようにし、あとで忘れてたり混乱しないように」(Nightingale, 1872-1900)と＜事実を書きとめる＞ように具体的な記録のしかたを示し、観察に基づいた事実の記録の重要性を説いている。さらに「行われたことが《なぜ》されたか《なぜ》他のことでなかったか・さらに症状やその症状の「因果関係」についても詳しく書くこと」(Nightingale, 1882)と述べている。記録を重要視した理由の一つは「以上のことが行われないと、一般に看護生はうぬぼれた、病棟の働く機械に墮落してしまう」(Nightingale, 1882)と述べており、自己の実践を振り返り、記録を通して＜実践の根拠を意味づける＞ことの重要性を述べている。

(3) 実習指導者の看護実践能力と教育指導能力

【実習指導者の看護実践能力と教育指導能力】には＜訓練の場としての病院＞＜実習指導者の看護実践能力＞＜実習指導者の教育指導能力＞のサブカテゴリーが含まれる。「看護婦は《訓練という目的のために組織準備された》病院で技術的に訓練されるべき」(Nightingale, 1882)と記述し、実習の場である病院の指導の在り方に言及している。

また、看護婦訓練学校における指導の責任者であるマトロンとは、当時は病院の看護の責任者でありかつ看護学校の校長でもある役職であったが、「マトロンは病院中で最も優れた看護婦でもある」(Nightingale, 1882)と記述し、看護の実践能力が不可欠であると説いている。また、「監督者は自らを看護婦たちの手本にしなければならない」(Nightingale, 1871)、「見習生に《よく学ばせたい》という願いをもっているのがマトロンでなければならない」(Nightingale, 1882)と述べ、教育的な熱意を持ち、看護実践能力と教育指導能力を兼ね備えた実習指導者の必要性を強調している。指導のあり方については「看護婦は、生徒・が自分の受け持っている事例に興味を抱くようにしむけなければならない。生徒はその病人の苦しみを感じとらなくてはならないのであり・彼女が関心を抱いた事例に関しては、彼女の看護は、二倍の働きをする」(Nightingale, 1882)と説いている。

VII. 考察

1. ナイチンゲールの実習についての考え方の特徴

1) 一貫した看護の理念に基づいた教育

ナイチンゲールは看護を定義づけ、看護者になるためには「看護とは」という一貫した理念に導かれた訓練が必要と考えていた。このことは現代では当然の考えであるが、当時は訓練学校がなく、誰でも看護婦として働くことができ、教育を受けていない看護婦がほとんどであった時代に、看護の専門性を示し、訓練を必要とする専門職として位置付けたという特徴がみられた。

2) 実践から学ぶ意義

結果に示したように、ナイチンゲールが19世紀の女性の状況について指摘していたことは、上流家庭に育ち、多くの知識を身につけた女性でもそれを活用する職業は家庭教師などのごく一部に限られるなど、実際の生活に役立たない例を多く見てきた彼女の当時の知識偏重の風潮に対するアンチテーゼである。ナイチンゲールは「看護覚え書」を自身のクリミア戦争での

壮絶な看護実践の後に著しており、実践の中で得た経験的な知識や看護をするためのヒントをまとめている。小澤(2004)は「看護覚え書は『実践知』の集結」と述べているが、本研究における複数の著作の検討でも、看護実践の中で得られる経験的な知識や、それをより良い実践に活かす方法を重要視していたという特徴が認められた。

3) 感じる力を活かした観察と考える力の訓練の重要性と根拠

ナイチンゲールは、観察する力とものを考える力の訓練という目標を掲げ、訓練方法について述べている。看護実践能力の向上のために、まず、五感を通じた観察力の必要性をあげ、その理由として、看護の対象が病気ではなく病人であることをあげている。そして、牛や高価な家具とは違い「feeling」(Nightingale, 1860)を持っている存在であると人間の特徴を述べている。人間のfeelingはその人なりの感じ方であり、刻々と変化していき、意図的に観察して感じとろうとしない限りわからないので、看護婦は「患者の顔に現れるあらゆる変化、態度のあらゆる変化、声の変化のすべてについて、その意味を《理解すべき》」(Nightingale, 1860)と五感を通して感じとる力を用いて観察を行い、患者の全人的な状況を捉える必要を説いているのである。黒田(1999)は、ナイチンゲールの著作を基に看護実践における観察力の重要性を考察しているが、今回の検討では、感じる力を活かした観察についての看護学教育における重要性とその根拠が抽出できた。

また、ナイチンゲールは単に記録の必要性を説くだけでなく、観察で得られる事実を記録し、記録を基に実践の根拠を意味づけるといふ、実践の振り返りの必要性を示している。

このように、臨床実習における観察や記録の重要性を明確にし、なぜ観察や記録による振り返りが必要であるのかについて論理的に示しているという特徴がみられた。

4) 臨床実習における指導のあり方

指導の場としての病院の在り方については、「看護婦は《訓練という目的のために組織準備された》病院で技術的に訓練されるべき」(Nightingale, 1882)と述べている。当時は学生が病院の労働力として扱われていることもまれではなかった(Seymer, 1998)。また、結果に述べたようにマトロンや婦長の指導者としてのあり方についても言及している。

このように臨床指導の必要性を説くだけでなく、指導の場としての病院の在り方に目を向け、看護実践能

力と指導能力を併せ持った指導者の要件を示したという特徴がみられた。

2. ナイチンゲールの主張の今日的意義

1) 臨床実習の意義の理解に基づく教育内容・方法

臨床実習は看護実践能力を育む場として重要であり、今日の看護学教育においては、看護実践能力の低下が指摘される中で、実習時間の増加や実習内容の改善が行われてきた。しかし、神原ら(2008)が看護実践能力育成に向けた教育方法に関する研究動向を分析したところ、看護実践能力の定義はまちまちであり、新人看護師の教育に関連した研究が多かった。また、看護実践能力育成に向けた看護基礎教育に関する研究は比較的少なく、看護技術教育の充実のための演習等に関する研究に偏り、特に看護実践能力育成に向けた実習方法を検討した研究は少数であった。また、「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」では、「看護実践能力の向上のために臨床実習でしか体験できないことは確実に体験できるよう調整すべき」(厚生労働省, 2011)と提言しているが、その体験内容は具体的には示されていない。このように、看護実践能力とは何か、看護実践能力を向上させるために臨床実習で特に重要となる体験は何か、なぜ臨床実習でなければならないのかなどについて、十分な吟味がされていないと考える。

ナイチンゲールは人間はどのような存在であるか(看護の対象の理解)を捉え、看護実践能力の向上を目指し、対象を把握するために感じる力を活かして観察する力と考える力の訓練の必要性を、なぜ臨床実習における訓練でなければならないのかという根拠と共に論理的に追求(教育内容・方法の吟味)した。このような考え方は物事の本質的理解につながるため、看護教育における臨床実習のあり方を発展させていくヒントとなるであろう。

2) 感じる力を活かした観察する力と考える力の重要性と指導方法

ナイチンゲールが「経験をもたらすのは観察だけである」(Nightingale, 1871)と述べているように、漠然と看護実践を繰り返すだけでは進展はない。実習時間の長短について検討するだけではなく、臨床実習の中身を充実させること、すなわち学生が自分自身の五感を使って、患者の変化や生活状況を十分に観察することができているかについて目を向けていくことの重要性が示唆された。基礎看護学実習においては、カンファレンスで、はじめは患者と話すことがなくベッドサイドに居づらかったという学生の感想があり、患者

さんに寄り添いそばにすることが重要である場合もあると臨床指導者に助言されることがある。寄り添うことで患者の feeling や変化を捉えていくというベッドサイドにいる意味を自覚することができ、患者との関係が深まっていく体験ができれば貴重な学びの機会となり得る。特に「感じる力」はナイチンゲールは人と関わる看護職に必須であることを強調しているが、この力は学生により個人差が大きい。病人の心情を感じとることは、日常で病人と接することの少ない学生にとってたやすいことではないので、ベッドサイドにおいて意図的に訓練を積み重ねることは重要である。山岸 (1990) は、ナイチンゲールの示した「感じる力」を「他人の感情に飛び込む能力」ととらえ自己の看護実践で活用する重要性を指摘している。この能力を修得して活用するためには、早い段階から訓練していかねばならないので、今回の検討で、臨床実習における重要な内容であることが示唆された。

また、「働く機械」(Nightingale, 1882) とならないように、臨床実習で実践したことの患者にとっての意味づけを行うための記録の必要性和臨床実習の事後学習としての振り返り学習の重要性が再確認できた。振り返り学習をどのように充実していくかについては今後の検討課題である。

VIII. 結論

1. ナイチンゲールの実習に対する考え方の記述内容は計 14 サブカテゴリーに分類され、【看護の理念に貫かれた教育】、【臨床における実践の意義】、【五感を通して感じる力を活かした観察】、【記録により実践を意味づける訓練】、【実習指導者の看護実践能力と教育指導能力】の 5 カテゴリーが抽出された。
2. ナイチンゲールの実習に対する考え方の特徴は、自己の体験から実践で学ぶ意味を重要視し、「看護とは」という一貫した理念のもとに看護学教育としての臨床実習を位置づけ、看護実践能力の向上のために、病人(看護の対象)を把握するために必要な感じる力を活かして観察する力及び考える力の訓練を目標に掲げ、その訓練方法と重要性の根拠を示したこと、看護実践能力と教育指導能力を兼ね備えた指導者の要件を提示したことである。
3. ナイチンゲールの臨床実習に関する考え方の今日の看護学教育上の意義については、看護実践能力の向上に不可欠な能力を論理的に検討し、感じとり観察する力と考える力の必要性を示している点で、今日においても十分に通用しうる本質的なものであ

る。特に感じる力の強化については、重要な指摘であり、この力を強化していく必要性が示唆された。

文献

- 神原裕子, 荒川千秋, 佐藤亜月子, 他 (2008): 国内外における看護実践能力に関する研究の動向－看護基礎教育における看護実践能力育成との関連－, 目白大学健康科学研究, 1, 149-158.
- 嘉手苺英子, 山本利江, 薄井坦子, 他 (1994): ナイチンゲールの調査研究の特徴「インド陸軍の衛生」「インドにおける生と死」を通して, ナイチンゲール研究, 2, 60-67.
- 木下幸子, 泉キヨ子, 天津栄子, 他 (1995): 看護婦の訓練と病人の看護 (その1)－看護婦の訓練について－, ナイチンゲール研究, 3, 61-68.
- 厚生労働省 (2011): 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書, 1-24.
- 小山真理子 (2007): 新カリキュラムがめざすこと「看護基礎教育の充実に関する検討会」を終えて, 看護教育, 48 (7), 555-562.
- 黒田るみ (1999): “病人の観察”の章にみる F. ナイチンゲールのとらえた観察に関する看護婦の思考過程の構造, ナイチンゲール研究, 5, 37-45.
- Nightingale, F. (1851): カイゼルスウエルト学園に寄せて, 湯槇ます (監) (1983), ナイチンゲール著作集 1 (第 2 版), 3-34, 現代社, 東京.
- Nightingale, F. (1860): 看護覚え書, 湯槇ます (監) (1983), ナイチンゲール著作集 1 (第 2 版), 139-414, 現代社, 東京.
- Nightingale, F. (1867): 救貧院病院における看護, 湯槇ます (監) (1974), ナイチンゲール著作集 2, 3-[51], 現代社, 東京.
- Nightingale, F. (1871): アグネス・ジョーンズを以て, 湯槇ます (監) (1977), ナイチンゲール著作集 3, 243-261, 現代社, 東京.
- Nightingale, F. (1872-1900): 看護婦と見習い生への書簡, 湯槇ます (監) (1977), ナイチンゲール著作集 3, 263-454, 現代社, 東京.
- Nightingale, F. (1882): 看護婦の訓練と病院の看護, 湯槇ます (監) (1974), ナイチンゲール著作集 2, 75-123, 現代社, 東京.
- Nightingale, F. (1893): 病人の看護と健康を守る看護, 湯槇ます (監) (1974), ナイチンゲール著作集 2, 125-155, 現代社, 東京.
- 小野寺利江, 薄井坦子, 嘉手苺英子, 他 (1991): 現

- 代看護につながる F. ナイチンゲールについての総合的研究（第 1 報）「カイゼルスウエルト学園によせて」について，総合看護，26（2），9-17.
- 小澤道子（2004）：ナイチンゲールに倣う実践知，聖路加看護学会誌，8（1），52-53.
- Seymer, L. (1998) : Florence Nightingale's Nurses : the Nightingale Training School, UT Back-in-Print Service, London.
- Woodham-Smith, C. (1950) / 武山満智子，小南吉彦（1981）：フロレンス・ナイチンゲールの生涯，現代社，東京.
- 山岸仁美（1990）：他人の感情の中に自己を投入する能力を求めて，ナイチンゲール研究，1，111-112